

うたごえ新聞

12 / 31
1 / 7

(1985年)

NO.1040

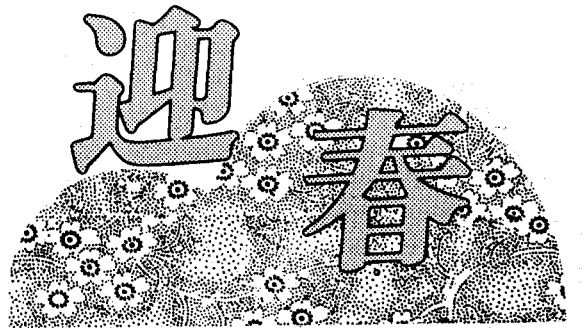
THE SINGING
VOICE OF JAPAN

日本のうたごえ全国協議会機関紙
発行 東京都新宿区大久保 2-16-36
☎03 (209) 0638-9 うたごえ新聞社
振替口座 東京2-5631 昭和34年1月31日
第三種郵便物認可 毎週月曜日発行
1部100円(〒25円)・月380円(〒120円)

新春の、この人

開けはなされた部屋で、白い光を見たあの日、私は満五歳を迎えなばかりでした。あの日から四十年。家中のガラスが爆風で打ち砕かれ、凶器と化した破片をふみこえて逃げた暗い防空壕の思い出が、幼い時のまますっかり脳裏に焼きついて今も離れないのです。

一九四五年八月六日、九月。あれから四十年を迎えたこの国の新しい年。「私たちと同じ苦しみを再びくり返させない」と原爆被害者を先頭に核兵器全面禁止の国民署名、海外派遣、歌の募集が大規模に展開されている中、「ここに一人の被害者であり、うたごえ合唱団員である人の手記を贈ります。新年号にあえて彼女の思いを語ってもらったのは、今年の私たちの決意でもあるからです。」



その翌日、親類の者を探して爆心地付近で死体をかきわけ、へたへたになって歩きまわった父は、二次放射能をたっぶり受けて、十三年前にガンで逝きました。背中を灼かれた母も健康とはおおよそ縁遠く、数種類の薬づけになりながらいつもの病弱をかげもぢぢまわる生活がいついています。今、私の周囲にいる被害者は八十代、七十代、六十代という高齢に達し、被害者援護法制定の実現を待ち望みながら、原爆地獄の苦しみを抱いて不安な毎日を生きつづけています。



死の恐怖におののいていた息子も堂堂と被爆2世を名のり……。(右が筆者)

「川には人がたぐさた」といつていましたが、それをきいて私は涙がこぼれました。こんな苦しく、いたさをまげんして、体があついたら一生けんめい水をもどめて……そんなすがたをうかべると、私はなんでもせせんならう、そういう体験もしないで、でも私は、その人たちのところへ水をあげたかった。水をのんだら死ぬといいたけど、私ならもういっぺん「はいのんで、ああ、おごい」といって死んでもいい。けれど、そんなら生きていけな。どんな苦しみにもたえていかなくちゃどうしてを学ばした。最後に歌をキレイな声でうたつてくれましたが、私もあんな、人の苦しみが分かるように歌いた。」

爆風と暗い防空壕の記憶 「死んだ女の子」の証言 反核・自転車行脚の息子と共に

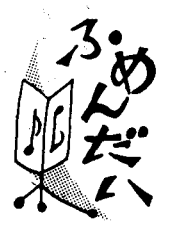
「川には人がたぐさた」といつていましたが、それをきいて私は涙がこぼれました。こんな苦しく、いたさをまげんして、体があついたら一生けんめい水をもどめて……そんなすがたをうかべると、私はなんでもせせんならう、そういう体験もしないで、でも私は、その人たちのところへ水をあげたかった。水をのんだら死ぬといいたけど、私ならもういっぺん「はいのんで、ああ、おごい」といって死んでもいい。けれど、そんなら生きていけな。どんな苦しみにもたえていかなくちゃどうしてを学ばした。最後に歌をキレイな声でうたつてくれましたが、私もあんな、人の苦しみが分かるように歌いた。」

「母は〇×△(被爆二世)だから、いつかきつと死ぬかもしれない」と息子が日記に記したのは小学六年生の時でした。今は私の故郷である長崎の大学に学び、昨夏、東京・代々木公園で開かれた反核十万人大集会(7月29日)に「反核銀輪隊」のノボリ旗をかかげ、たった二人だけの長崎・東京・広島・長崎の自転車行脚をやつてのけました。親が被害者である故に、子ども心にも死の恐怖におののいてたわが息子が、今では堂堂と被爆二世を名のり平和活動家として隊列を組みよるようになりました。

語り部として
三池闘争以来、うたごえ連
※次週は1月14日号(12月28日
発送)、新年は1月21号(1月
11日発送)より発行。

動をうつつけてきた私としてうたごえをぬきに平和運動はあり得ないし、私の行く所、そこにはいつもうたごえがありました。九州のうたごえ祭典福岡のうたごえ祭典にはステーションに被爆者を組織し、「原爆を許すまじ」をうたい上げたのも、いつこの間のことです。被爆四十周年の年にあたり私はこれからも被害者の「語り部」として子どもたちに語り継ぎ、核兵器全面禁止の署名をとりくみつつ、合唱団員として歩みつづけたらと思えます。(福岡あらぐき副団長)

「今年こそ精進しようがんぼろと決意している」「力はないが友人をふやすこと、平和コンサートを二回開くこと、その決意をした」新しいたより二人の位置のちがいがわかる。



「指揮者と合唱の呼吸がもう一歩、出だして注意した方がよい。ソプラノの音が乱れるとメロディーが生きたいから練習を。しかし可能性はいっぱいある」

確かに音楽は聴く人によつてさまざまに受けとめがある。が、前記二つのためりと批評を比べてあなたならどちらを喜ぶか? 抽象的な書(ほ)めごはには少し穴が多い。

「私の街ではたつた三本の木を守るために住民運動が起きた。どんな合唱団員も街に住み、その街の善しを背負っているはず。このことを目を向けないでほんもの運動は見えてこない」と林学氏は声をひ。

情勢を分析するといつては、自分たちが客観的に置かれている状況下で多数派を獲得できる条件があるかを見い出す。その情勢は世界的視界から三本の木に至る流れを見なければならぬ。

春の海
四十年目も
波に押す
(末)

◆新春の詩(滝いく子) 2面、福島サークル訪問 3面、'84-'85注目の芸能

◆人(伊藤強)、映像と音楽 関谷邦夫) 4面、新春帆足まり子さん 5面、過

◆疎を逆手にとる会(広島・総領町の人づくり、古里づくり) 6・7面、そう飯沢 匡さん

◆ビクトル・ハラ(矢沢寛)、世界平友祭 8面、新春話題の映画

◆(ACT・博)、年末年始情報 9面、音楽小話(守屋博之)、通信 10面、杉浦運

◆動40周年を語る 11面、地図から消える村(岐阜・徳山村) 12面

中日本
総局企画